

## 法王の健康状態

6月27日にヴァチカン経営のジェメッリ総合病院の開設50周年ということで、法王は午後5時30分に訪問する予定だった。病院側は準備を全て終えた。患者達も法王がお話をする病院前の広場に集り出していた。それが10分前に法王の体調が優れないという事で、訪問中止の報が流れた。皆はがっかりしたが、それ以上に法王の体調を心配したのだ。

現ローマ法王の公務のキャンセルはこれが初めてではない。

第1回目は昨年12月4日。パウロ6世ホールでのミラノのエキスポ関係者との謁見。

第2回目は今年2月28日。法王は熱があつて、ローマ教会のセミナリオを欠席。

第3回目は5月15日。ローマのディヴィーノ・アモーレにある聖母マリアの礼拝所に行く予定だったが、キャンセル。

第4回目は5月16日の一般謁見を中止。

第5回目は6月19日。聖体節の行進をキャンセル。

現法王は今77歳。22歳の時に肺炎を患って、肺の一部を切り取ってしまった。法王になってその激務は休む事を許さない。法王はその事について心配はしていないが、たまには、やはり、ストップ状態になるのだ。法王は更に背中を痛めている。毎週水曜日の一般謁見の後、車（パパモービル）に乗り、広場を回っている。体を曲げて、車上から子供達を抱き上げている。法王はその時の痛みを意に介さないが、かなりの負担になっているようだ。

法王に選ばれる年齢というもの、一般の人が既にリタイアしている時になる。カソリックの世界でも一般僧侶のリタイアの年齢は75歳と決まっている。歳を取った法王には骨の折れる役目だが、「神の代理人」として、納得して重労働に励んでいるところである。現法王は途中でリタイアする事なく、墓場にたどり着くまで職務を全うすると宣言している。

## 何故韓国へ

法王フランチェスコは、8月13日より18日まで韓国を訪問した。現法王にとって、アジアへの「司牧の旅」は初めてである。表向きの理由は、韓国でアジアのキリスト教の「若人の集い」があったからである。韓国はカソリックが急速に伸びている国である。信者数は現在500万人以上を教え、国民の16.7パーセントを占めている。また、124人の殉教者を福者に任命するつとめもあった。その中には唯一の中国人、JAMES JUMUN—MOも含まれている。また、真意として取り沙汰されているのが、ヴァチカンと中国との国交再開であり、中国内でのキリスト教の容認にあるようだ。

先ず韓国での様子のみをみよう。法王は韓国の平和への努力を高く評価している。そして、韓国の政治高官、文化人のみならず、世界の施政者に向かって、「地球規模のグローバルゼーションの中であつて、平和を求め、共通の善を求める行為は、外交によつても一部は求められる。しかし、真の平和は、真の対話、真摯に相手の言葉に耳を傾けるところから始まる。互いに非難したり、力を誇示するところからは生まれぬ。」と語ると共に「偏ったグローバルゼーションと消費至上主義」を非難した。

今回の法王の韓国訪問に際して、周辺国々ではどのような態

度を取つたのだろうか。ヴァチカンとしても放っておけない問題を抱えているのだ。

先ずは日本。表面的には静観を装っていたが、裏面では政界にもカソリック界にも動揺の姿はあつたようである。何故、法王はアジアで第一に韓国に行くのかという問題である。前前法王ヨハネ・パウロ二世の時には、日本人は真面目で、正直で、カソリックはこれから大変な飛躍をするであろうと期待されたので、この法王はアジアの国々では最初に日本にやって来た。しかし、今日本ではカソリックは全然伸びていない。集団野外ミサをしても、一体何人ぐらい集るだろうかと危惧されていたからである。ちなみに韓国での野外ミサには100万人が集った。日本のカソリックの信者は僅か45万人といわれる少数派なのだ。

北朝鮮はローマ法王の韓国訪問の件については一切報道していないが、法王の飛行機がソウルに到着する35分前の8月14日10時46分に、日本海に向け、3発の220キロ級のミサイルを飛ばし、自分たちの存在と力を誇示したのだ。

中国の取った態度はどうだったのか。法王専用機が中国上空を通過する事を許可したのはもちろん中国政府だ。中国上空を飛行するのは現法王フランチェスコが初めてである。そこで、法王は上空通過中に機内から習近平にメッセージを送った。その内容は「平和の神の祝福と国民の安寧」を祈るというものだった。法王から中国要人に対しての「対話」の要求だ。この返事は後日届いただろうが、一般公開されていない。

中国人で、ソウルの「若者の大会」に参加許可のためにヴィザをもらったのは、僅かに40～50名ぐらいだった。法王は次のように語った。「平和とはただ単に戦争の無い状態をいうのではない。義の働きが必要だ。義は忍耐を必要とする。義は過去の不正を忘れろとは言わない。しかし、それは赦し、寛容、協働を通して不正を超越する事を望んでいる。」そして、法王は8月15日の「聖母マリアの昇天祭」を後日に控え、「マリア、平和の女王よ、憎しみを忘れ、調和の中に生きるよう、我々を扶けたまえ」と結んでいる。

中国でのキリスト教の伝道は、1601年にイタリア人でイエズス会のマテオ・リッチが北京に入ってから始まった。時は経ち、毛沢東の下、共産主義国家中国となり、宗教は否定されたために外国人伝道師は国外追放されると共に、ヴァチカンとの外交関係も途絶えた。中国には、現在でも2億5千万人のキリスト教徒がいるといわれている。これは、アメリカやブラジルにおける数よりも多いのだ。中国では、外国から来た教えではなく、昔から固有の宗教を守っている感じがする。つまり、儒教や仏教は迫害を受けていない。キリスト教の教会は、今年2014年だけでも、350の教会や空に聳える十字架が壊されたり、下ろされたりしている。ヴァチカンは中国内にいるキリスト教徒を守るためにも、中国に対して、実りある対話を開くようにシグナルを送り続けている。中国を周辺からジワジワと対話に応じるように仕掛けている。法王は来年1月にはスリランカとフィリッピンを、8月には、アジアの若人の集いの開かれるインドネシアを訪問する事になっている。

(13頁へ続く)

(3頁からの続き)

人の方が生きいきとしている”などと嘆いている人がいますが、それは、切り出された用木は、まだ根のある山の木とは違うということ。用木は期待される役目を果たすために、手入れもされるし磨きもかけられる。しかし、それを嫌がり拒否していれば、やがては打ち捨てられ、根がないので朽ちてしまうことになるのです。

しかるに、一方、必ずしも全ての人がよくになるわけではありません。ですから、自分がよくになるについての承認と協力を、家族や身近な人たちから得ることが必要になるのですが、それを得ることが容易でないことも、また、「ひながた」に示されているところなのです。

(4頁からの続き)

**[補]** 本連載 32 「その他の地域の海外伝道」でメキシコの天理教を書いたが、以下のように若干の補正を加えたい。

名古屋メヒコ教会を設立した安藤ペレス・せつ子は絵の勉強でメキシコに渡る前、名古屋大教会で森井敏晴会長（当時）から信仰の仕込みを受けた。森井会長から絵の勉強だけでなく、おたすけにメキシコへ渡るんだと、海外伝道への熱い思いを聞かされた。それは森井会長が二代真柱から教えられたことでもあった。メキシコでの安藤は美術学習とともに布教活動に勇躍し、大勢の若者をようばくに育てた。

(5頁からの続き)

けて死んだときに、そのながした血によって洗礼されて殉教者となる血の洗礼や火の洗礼などがある。天理教では殉教者という意識がそもそも不在であるから、それに対する儀式も不在である。しかし「みかぐらうた」の「いっせんにせんでたすけゆく」（九下り目の一）を「一洗二洗で助け行く」と漢字の訓読み表現をした場合（『おかぐらのうた』上田嘉成、天理教道友社、545頁、『みかぐらうた・おふでさき』村上重良校注、13頁）は、やまとことばではなく不自然で、くわえて天理教にも洗礼儀式があるのではないかと未信者には誤解されるおそれがないとは言えないであろう。筆者の「せん」論はやまとことばの多義性に触れて幕末の貨幣論から別項でおこなう。

(7頁からの続き)

くない。留学経験者と配偶者は、天理移民同様、ブラジルの天理教の「日系人化」を維持させる要因になったとみられる。また、同じ世代にはブラジルに移住して会長になっている日本人が7人おり、彼らも「日系人化」を強化しているともいえる。

しかし、その一方で、子弟世代は日本で「ブラジル人」アイデンティティを強く意識するようになってきている。学生生徒講習会は子弟世代が企画しており、ブラジル人の感覚に合うように進められ、関心を高めている。このようにブラジルの天理教では「非日系人化」への模索が始まっている。

(10頁からの続き)

**またもや行進中にストップ**

7月27日午後7時、シチリアのパレルモで、カルメロ派の聖母マリア像の行進が、ポンティチェッロ通りの葬儀屋の前で、中年男の「生まれ」の一声でストップ。その葬儀屋というのは

マフィアのボスの経営だ。そのボスは捕らえられていて、北のノバラの刑務所に1年半も収容されているのだが、彼、アレッサンドロ・ダンブロージョは今40歳だ。

同じような事件があつてからまだ1カ月も経っていない。それは7月2日、イタリア半島の南のレッジョ・カラブリア州のオピード・マメルティーナで、自宅監禁の罪に問われている「ンドランゲータ」のボスの家の前で「恩寵の聖母マリア像」が、行進中にストップして、「お辞儀」をしたというものだ。その後、その時のマリア像の担ぎ手の25人が調査によって、7月9日に明らかにされた。その25人の中の一人は、「我々は『ドラングエータ』の二つの異なったグループに属し、神輿の前後に分かれている。しかし対立関係にあるのではなく皆友達だ」と語っている。

1800年代より「信仰会」と言う名目の小集団がシチリアではたくさん結成されていて、その実態はなかなか把握されないうでいた。例えば、このアレッサンドロ・ダンブロージョはカルメロ山の聖母マリア信仰会の信仰深き尊厳者と見られていた。地元の検事フランチェスコ・メッシオネは「この出来事は、この地区の日常生活に暗い影を落とした不幸な出来事である」と言及した。残念ながらマフィアのサブカルチャーは未だ生き残っているのだ。警察や陸軍警察の告発、逮捕そして内部告発にもかかわらず、事件のあったパレルモのパラロー界限では、40代のダンブロージョは、若者の間では神話的人物である。それは甥のフェイスブックへの次のような投稿でも読み取れる。「彼は我々全員の誇りである。」「彼は唯一者であり、特別者である。」この一連の出来事に、地区の神父ヴィンチェンツォは「不意の停止だった」「今年もまた起きてしまった」と呟いていた。枢機卿パオロ・ロメオはその行進のために代表団を送っていたし、ヴィンチェンツォ神父は「信仰会」のリストを要求されていた。事件のあった当日は枢機卿より特使も送られていたのだ。マフィアたちはこの「信仰会」を隠れ蓑にするのか、聖母マリア像の行進に非常に熱心だし、毎年復活祭前の聖金曜日の重大な聖行進を企画するのだ。これらの出来事はヴァチカンに苛立たせている。ヴァチカンの仲介は厳しさを増し、マフィアの介入を防ぐために「信仰会」の解散を求めている。

## 比較思想学会でパネル発表

金子 昭

比較思想学会第41回大会が7月20日、島根県松江市の中村元記念館で開催された。8本の個人研究発表、パネルディスカッション及びシンポジウムが行われた。私はパネルディスカッション「思想としての生命 第1回『出生と生命』」の部にパネリストとして発題した。パネリストとそのテーマは次の通り（発題順）。田中かの子・駒澤大学講師「いのちの『ありのまま』を引き受ける、という原則からの一考察」、安藤泰至・鳥取大学准教授「この世に生まれてくること—生命操作の時代のなかで—」、金子昭「人間的生命の出生をめぐる哲学的人間学の試み—」。コーディネータは沖永宜司・帝京大学教授がつとめた。